2017 No. 19

2017 年 12 月 30 日発行 編集・発行:多摩大学 〒 206-0022 東京都多摩市聖ヶ丘 4-1-1 TEL:042-337-1111 FAX:042-337-7103 http://www.tama.ac.jp/ 通巻 21 号

大学での4年間は一生の宝物

経営情報学部 4年 山崎 啓道

私が多摩大学で過ごしてきた4年間を一言で表すとしたら「充実」 という言葉がぴったりだと感じています。たくさんのことを学び、た くさんの人に出会い、そしてたくさん遊んだ4年間でした。

高校2年次の文理選択の時に、数学や物理が比較的得意だったことから初めは理系の道に進もうと考えていました。しかし、ふと将来自分がどんな職業に就いてどんな仕事をしているのだろうと考えるときがありました。真っ先に思い浮かんだのは経済系。家で日本経済新聞を購読していたので、時間があるときに読んでいることがあり経済系のニュースが頭の中に入っていたのかもしれません。(当時はスポーツ欄を中心に読んでいましたが…)そのようなことを考えたことがきっかけで経済系が学びたいと思うようになり、文系に進み大学を受験しました。

多摩大学へ進学した理由は少人数制の実学を売りにしていたから。高校生の時は先生とあまり密な関係を築くことができませんでした。そのことから気軽に相談ができる環境が自分にあっているということに気づき、2014年4月に入学しました。高校生の時にはすることができなかったアルバイトも開始し、順風満帆な大学生活の始まりと思っていました。しかし、大学の授業は高校とは違い、より専門的な内容になり授業についていくのがやっとでした。アルバイトも自分でお金を稼ぐ大変さを身をもって知ることができました。

入学早々心が折れかけていたときに友人に誘われて参加したのが、 毎週土曜日に九段下にある多摩大学九段サテライトで開講している寺 島実郎学長主宰のインターゼミ(社会工学研究会)でした。自分たち で課題を見つけ、文献調査やフィールドワークなどを通じて一年間か けて一つの論文を仕上げていくこのゼミでは、自分が所属している経 営情報学部の学生だけではなく、グローバルスタディーズ学部や大学 院生、そして OB・OG の方々と共に、学長を含めて 13 名の教授陣の 下いくつかの班に分かれて研究をしていきます。私が最初に選んだの は多摩学班。テーマは「2040年の多摩の展望」。研究の中にリニア中 央新幹線について触れる部分があります。私の出身地山梨県にリニア の実験線があり、幼い頃からよく見ていたのでこの班で活動すること に決めました。それから多摩地域以外の地方にある自治体の取り組み を知りたいと2年次は「ワークライフバランスの観点からみた「若者 移住による地方活性化」の方向性を探る」を、さらに多摩地域につい て深めていきたいと3年次には「多摩ニュータウン再生に向けた新た な活性化策の研究」をテーマに3年間所属しました。インターゼミで

は優秀で頼りになる先輩や意識の高い学生が多く自分自身も刺激を受け、より勉学に励むようになりました。

多摩地域についてもっと知りたいと考えていた私は、大学の地域学生センターで行っている取り組みについて知りました。地域学生センターとは多摩大学と多摩市役所、UR都市機構が連携して生まれたシェアハウス型の学生寮で、大学近くにある団地に住みさまざまなことを学んでいきます。私はこれだと思い3年次の4月から1年弱入居し、活動を行いました。市役所主催の行事にボランティアスタッフとして活動したり、地域の総会に参加したりするなどたくさんのことを学び、たくさんの人と出会うことができました。

学内の活動に留まらず、多摩地域にある企業が行っている学生対象のセミナーにも半年間参加しました。実際に多摩地域がおかれている現状やこれからの多摩地域の未来について企業が独自に研究していることも学ぶことができ、この頃からたくさん多摩地域について考察し研究をしてきたので、この経験が生かせる仕事をしたいと考える機会が増えていきました。

そして就職活動。3年次の11月から本格的に行動し始め、業種を絞らずさまざまな企業のインターンシップに参加しました。企業の人事の方々や他大学の学生にも多く出会い、いるいるな情報交換やたまに飲みにいくことも…。毎年就職活動についてニュースで取り上げられ話題になることから身構えていた私でしたが、実際のところ就職活動は楽しんでいたと思います。機会がないと入ることができないオフィスで、会社の雰囲気を感じ、将来の働く姿を想像することも良い学びと刺激となり、忙しい時では週7でインターンシップに参加していましたが、苦ではありませんでした。

試験や面接も順調に進み、内々定を複数社いただくことができました。その中で最終的に選んだのは、就職活動を始めた当初から一番行きたいと考えていた多摩地域にある金融機関。やはり自分が4年間学んだことを一番生かすことができるのはここしかないと考えました。就職活動を終えた現在は、資格取得のため勉強に励む毎日ですが、残り僅かとなった学生生活を全力で満喫しようと考えています。

多摩大学で過ごした4年間はあっという間でしたが、それ以上に充実した毎日を送ることができたと思っています。もちろん内定をいただくことや大学卒業がゴールではありません。常に学ぶことを忘れずに次なるステージで活躍できるように頑張っていきたいと思います。



2016 年度インターゼミ多摩学班



インターゼミ箱根合宿での発表の様子



寺島実郎学長、久恒啓一副学長、指導教員と一緒に

〈木村知義 産業社会特講〉

「デジタル時代のメディア実践」の現場から

夢をカタチに!

~はじめて出会った映像制作の世界で見る夢~

経営情報学部1年 菅原 美涼

秋学期初日、「デジタル時代のメディア実践」という聞きなれない講義。 何も分からないまま教室を訪れた。ほかの講義とは違い、人数は少なめ で、学年もさまざま、明るい雰囲気の教室だった。

以前 NHK で働き、メディアについて知識も豊富でいろんな経験をさ れている木村先生の話にとても興味を掻き立てられた。そして、座って いるだけで単位が取れる講義ではなく、デジタル・ストーリーテリング の制作や、ビデオ制作をしたりするということで、やりがいがありそう と思った。

デジタル・ストーリーテリングとは、写真と制作者本人の声でスライ ドショー形式の短い作品にする事だ。私は初めて出会ったのだが、ただ のスライドショーではなく、自分のナレーションも入れるのか、面白い なと思った。自分の想いをわかりやすく伝えることで、多くの人々に届 く手法ではないかと感じた。とても時代に即した講義だと、わくわくし た気持ちで履修することを決めた。

全ては企画を考えることに始まる!

続く教室は、企画についての授業だった。考えたことを付箋紙に書き 出してみんなでペタペタ貼り付けることになった。私は、「寝ていると きの夢とは?」と書いた。なぜ、この企画かというと、夢はすぐに忘れ てしまったり、良いところで終わってしまったり、普段思い浮かばない ような意味不明で不思議なストーリーだったり、いつも夢の真相が気に なっていて、これを機に夢について調べ、デジタル・ストーリーテリン グにしようと思ったからだ。

「これは面白い!でも難しいぞ!夢をどう見えるものにするのか、ど うすれば映像で表現できるのか楽しみだな」と木村先生。そのとき私は、 先生に面白い企画と言われて単純に嬉しかった。「まあ、どうにかなる だろう~」と気楽だったけれど、後々この言葉の本当の意味を痛いくら い実感することになった。授業が進んでいくにつれて、どうやって映像 にするか、そのための素材はどう集めるのかなど、何も考えずにとても 難しい企画を立ててしまったことに気づいた。

当たり前だが、夢を写真や動画に収めることはできない。諦めて違う 企画に変えようかと思った。しかし、先生は「つくる喜び、達成感を味 わおう」といつも一生懸命言っている。この言葉を聞くたびに、一度や ると決めたからには、やっぱり最後まで諦めずに作り上げて達成感を味 わいたいと強く思うようになった。だから今は、絵を描いてみたらどう か、友達にインタビューして表現できないかとか、どうすれば夢を「見 えるカタチ」にできるか必死で考えている。映像にするのが難しい企画 だからこそ新しいアイディアが思い浮かんだ時の喜びは大きい。もっと もっと、新しいアイディアを考えたい。

この教室で学んだことは、今まで学んだことと一味違う。映像の知識 や、ビデオカメラの使い方も学んだ。また、自分で考えた企画を形ある ものにすること、その難しさと楽しさを味わうこともできる。でも、一 番は、やり抜くことの大切さを学んだことだ。すぐ諦める自分の性格が、 この教室での経験で変わった気がする。これから生きていく上で大きな 試練が降りかかってきたら、今までの私は諦めて楽な道を探して生きて いたと思う。でも今の私は、絶対にあきらめない。乗り越えた先にどん な達成感があるのか楽しみだから。



アハッ~、けっこうイケてるカメラウーマン



私の企画は『夢』、プレゼンで伝わったかな

カンボジアの"声"に導かれて ~私の初めての動画制作記~

経営情報学部1年 田島 宏基

「人生はクローズアップで見ると悲劇だがロングショットで見ると喜 劇である」

チャップリンの有名な言葉だ。目の前で起きている出来事や悩みが悲劇 であっても、長い目で見れば代償を伴う方向転換であって喜劇かもしれ

この授業を履修することを決めたのは、僕自身ではなく、きっと神様 だと思う。正直な話、この授業を履修したのは、空コマの穴埋めだった。 しかし、人生は出逢うべくして出逢うものだ、すべての出会いには意味 がある。

「産業社会特講ーデジタル時代のメディア実践」。この授業は、企画を 提案し想いを映像作品という形にする授業だ。アイデアを出して表現す るのが大好きで得意な私にとって、ここはまさに夢のような教室だった。

いざ企画を!となって、私は「カンボジアの知られざる歴史」という 企画を真っ先に提案した。この企画が生まれたのは夏のインターンシッ プ、サムライカレープロジェクトで興味を持ったことが始まりだ。よく 知られていることだが、ドイツで起こった大虐殺は有名な話である。ヒ トラー率いるナチスがユダヤ人を大虐殺した。聞いただけでも無茶苦茶 な話である。そして、あまり知られていないが、カンボジアでも大虐殺 が起きた。知識人、眼鏡を掛けている人、手が綺麗な人、誰もが虐殺の 対象になりえたのだ。一体、人の命をなんだと思っているのだろうか。 こんなことはあってはならない!多くの人に伝えなければ!と、カンボ ジアの現場に立って強く思った。なにより、今まで何も知らずに過ごし てきたことに怖ささえ感じた出来事だった。

私はこの企画を取り組むにあたって、もう一度カンボジアについて調 べることにした。掘れば掘るほど根は深く、今まで見えなかった苦しみ や、人々の「声」が目の前に浮かび上がってきた。記録や写真を通して 悲鳴が聞こえてきたのは初めてだった。動画作品の制作なんて生まれて 初めてだったが、秋学期にこの授業をとってから、すでにこの作品の他 にも2作つくっている。でも、この作品には特別深い想いを込めた。

オープニングに木が育つ絵が出てくる。一見、意味のないカットだが、 そこにも想いを込めた。人間の歴史は一本の木である。ルーツは皆同じ。 たくさん、枝分かれを繰り返して、その枝の先にしがみつく様にしてい る葉が私達だ。そして、歴史を重ねるごとに幹は太くなっていくという メッセージをこめている。それぞれのカットに表の「ストーリー」と裏 の「隠した想い」を密かに埋め込んだ作品に仕上げた。

また、この作品は「過去のお話」にはしたくない。「未来のための作品」 にしたい。未来は余白だ。歴史の負の 1 ページであると同時にその国に とって、長い目で見た時に今に繋がる平和への第一歩だったかもしれな い。だからこそ、私の作品はそれを表現したい。歴史という大きなストー リーも、人生というストーリーも作り直せる。だからこの作品、「知ら れざるカンボジアの歴史」は未完成で終わるつもりだ。

この授業のせいで睡眠時間が短くなった。この授業のせいで時間がな くなった。この授業のせいで高い編集ソフトを買ってしまった。この授 業のせいで人生が変わってしまった。この授業のせいで学校が楽しくて しょうがない。

私の「メディア実践」、2017年秋の報告である。



真剣!う~む、ビデオカメラって面白い 衝撃、カンボジアの "声" を聴く、2017年夏



私が多摩大学で学び得た貴重なもの

グローバルスタディーズ学部 4年 フラーンクス スカイ

私は、多摩大学で4年間過ごした中で社会人として生きていく 上で必要なものをいくつか学ぶことが出来た。その学び得た事に ついて、ここに書き記していく。

元々、私はかなりの人見知りで、人と話す事や人前に立つことに対して強い苦手意識を持っていた。小学校低学年の頃は、劇や発表会で人前に出て演技をする役を自ら買って出るほど積極的に参加していたが、高学年になると人前に出て何かをすることに嫌悪するようになり、何事にも裏方に回りなるべく人目につかない所で作業することが多くなっていた。

このように私が人前に出ることに対して嫌悪するようになったのには苦い思い出があるからである。小学生の頃、学校行事で誰もやりたがらなかったリーダーを無理矢理引き受けさせられた。人に対して意見を言ったりすることや大勢の意見をまとめるなど上手くできないことが次々と積み重なり、それに対して色んな人に文句を言われてしまい、結果的に不満足な形になってしまったことが私の中でトラウマになっていた。それからは人前に立って何かを行う機会がある度に、人に文句を言われてしまうのではないかと心配をしたり、人に自分がどう思われているかがとても気になるようになった。悪く思われたくないという気持ちが強く、失敗をすることが恐ろしくて仕方なかった。自分が出来ないと思うものは全て避けて、逃げ回ってきた。それは中学生や高校生になっても変わらず、むしろ人前で何かをするという事に苦手意識は薄れるどころか大きく色濃くなっていった。

そして、大学入学当初には人と話すことに対しても苦手意識を 持つようになり、話している中でその相手に不快な思いをさせな いかと余計なことを考え、伝えたい話などは事前に頭の中でまと めないと相手に自分から話しかけることができなくなっていた。

しかし、多摩大学はその逃げが通用するような場所ではなかった。多くの授業にディスカッションやプレゼンテーションなどがあり、嫌でも人前に立たされ、コミュニケーションを取ることを必要とされる。高校生までは問題に正面から取り組まずに、逃げてきた私であったが、大学で出来た勤勉な友人たちと一緒に過ごしていく中で自分も変わらなければならないと思うようになり、それからは目の前の問題から逃げずに取り組むようになった。それでも、大学に入学して間もない頃はAEPで毎週あるプレゼンテーションが憂鬱で仕方がなかった。英語でプレゼンテーションをするのが初めてで構成をどうしたらいいのか分からない、文法が間違っていたら恥ずかしい、そのような気持ちで一杯であった。

毎回前に出て、なるべく原稿無しで話さなくてはいけないのが決まりであった為、不安ばかりで、発表の時は自分では大きな声で話をしているつもりが実際は声が小さく、前列の人がぎりぎり聞こえるくらいであった。それでも、私なりに改善できるよう考え取り組んでいた。すると、評価に厳しい先生に AEP 最後の発表で、声はまだ少し小さいが構成など他の要素は完璧だったと好評価を貰うことができた。小さなことだが、自分なりの努力や取り組みが認めてもらえた気がして素直に嬉しかったことを覚えている。その評価用紙は今も大切に保管している。

他の授業でも勿論プレゼンテーションはあった。日本語の発表も増え、聴いている人も多くなり、プレッシャーも大きかった。しかし、逃げることはできない、失敗は絶対にしたくない、そして何より過去の自分のように中途半端なことをするのは嫌だと考え、一つ一つの発表をできるだけ完璧に仕上げるよう努力するようになった。すると思いの外、周りの評価は良く、授業評価自体も良い結果を貰うことが出来た。こつこつと目の前の事に向き合い努力を積み重ねていった結果、成績も徐々に上がっていき、最終的には成績最優秀者に二度も選ばれた。ここで私が学んだことは、変わりたいと思う意思と問題に向き合う勇気を持ち、しっかりと努力をすれば人は変わることが出来るという事、自分の行動次第で良くも悪くも周りの評価は変わるという事、そして結局、嫌な事からは逃げられないという事であった。

大学2年生になると、私を含めた友人数人で地域貢献サークルを結成した。藤沢市民の方や一般企業の方、公的機関の方まで多くの人と交流し、イベントなどを協力して行うようになり、知らない人と話す機会も自然と増えた。まだ凄く緊張したり、上手く言葉がまとまっていなかったりするが、昔のように自分の苦手分野から目を背けたりはせずに自分なりに取り組むことが出来るようになっていた。そのような場を通して、自分の成長を実感することが出来、多くの人々との交流によって社会人に課せられる責任について学ぶことも出来た。

これらが多摩大学グローバルスタディーズ学部で私が学び得た 事柄である。多摩大学は社会人として必要な心構えや取組み姿勢 を学び、身に付けることが出来る場所である。今まで様々なこと に取り組み、卒業を控えた今だからこそ自分が何を得たか認識す る事が出来た。それは責任を持って行動する社会人としては、と ても重要な基盤を形成するもので、それを身に付けることが出来 た今、多摩大学に来て良かったと心の底から思っている。





大切な友人たち

多摩大学経営情報学部学生会執行部 ~活動紹介~

経営情報学部学生会執行部部長兼 多摩祭実行委員会委員長 3年 玉木 真悟

第 29 回多摩祭「グローカル・フェスタ 2017 in TAMA」開催

第29回多摩大学多摩祭「グローカル・フェスタ 2017 in TAMA」は歴代最高の集客人数を達成し無事に成功を収める事が出来ました。 この場をお借りして教職員の皆様、保護者の皆様、そして共に多摩祭に参加し盛り上げてくださった学生の皆様にお礼申しあげます。

今年度の多摩祭は「子ども」をターゲット層に、多くの子ども向けのイベントをご用意いたしました。集客効果を生むヒーローショーにも手を加え、毎年戦隊もののヒーローしか呼ばない所を、今年は「仮面ライダー」と女の子も楽しめるよう「プリキュア」のショーを開催いたしました。また、ショーに来てくれた子ども達にもっと楽しんでいただくために、1年生(プレゼミ)に縁日と綿飴などお祭り系の屋台の出店などを協力していただきました。

そのほかに、今年のテーマの「トラベラーズ」を全面に押し出したワールドスタンプラリーや、豪華景品が当たるドリーム大抽選会、 そして初の試みになるお笑い芸人を招いての後夜祭やその他多くのイベントをご用意し、多摩祭に来ていただいた全員が楽しめる企 画に出来たと思います。

前年度多摩祭実行委員会は8人の集まりで多摩祭を作りましたが、 今年度は19人でさらに素晴らしい多摩祭を作り上げ、大学と地域に 貢献する事が出来たと思います。

今年で2年間多摩祭実行委員会委員長を務めた私も引退ですが、 来年の多摩祭に向けて後輩達にバトンタッチをしたいと思います。

来年度も素晴らしい多摩祭になると思いますので、是非足をお運びいただけると幸いです。



アリーナでは子ども向けのさまざまなイベントを開催

ハロウィンイベント開催

2017年10月31日にハロウィンイベントを開催いたしました。「季節感がある大学校内」を目指し、今年度の七夕や前年度のクリスマスは装飾を行ってきましたが、今年のハロウィンは1年生のメンバーが中心に装飾をおこない、今までに無い新しい風を学生会に取り入れることが出来たと思います。

その一つとしまして、最近「インスタグラム」という SNS ではやっている「インスタボード」の作成が特に印象に残っています。このインスタボードには 11 月に開催の多摩祭の広報的な目的もあり、多くの多摩大生たちに近日多摩祭があると周知できたと思います。

その他にも飾りつけには力を入れてアゴラ前の広場では今まで にない形で、不気味に、なおかつ季節感がでた装飾に仕上げるこ とができました。







ハロウィンの装飾写真

ハロウィンのインスタパネル

経営情報学部学生会所属学生団体(サークル)紹介

アボガド

テニスサークル アボガドです!

アボガドでは週に3日間、月曜日・火曜日・金曜日にみんなでテニスをしています。イベントもたくさんあり、先輩後輩関係なく、仲良く楽しいサークルです。テニス好きな人や、やってみたい人、イベントを楽しみたい人はぜひ遊びに来てください!

またアボガドでは毎年 夏にある大会に向けて 日々活動しています。

テニスの経験者・初 心者問わずテニスに興 味がある方はぜひアボ ガドへ!!



サザンクロス

私たちのサークルは 1989 年の建学当初からある演劇サークルです。

年3,4回行われる公演に向け、日々練習・チャレンジを重ねております。経験・未経験は問いません、むしろ未経験でも 大歓迎です!また、役者だけではなく、照明・音響といった裏

方の作業や、ポスター・パンフ レット作成などの広報なども募 集しています!

私たちと舞台という組織でプロジェクトをこなし、充実した学生生活を送りましょう!

ご連絡お待ちしております。

